

鳥越 碧

Torigoe Midori

漱石の妻



講談社
文庫





講談社文庫

常州大学図書館
藏 漱石の妻 章

鳥越 碧

講談社

著者 | 鳥越 碧 1944年福岡県北九州市生まれ。同志社女子大学英文科卒業。商社勤務ののち、'90年、尾形光琳の生涯を描いた『雁金屋草紙』で第1回時代小説大賞を受賞。他の作品に『あがの夕話』『後朝』『萌がさね』『想ひ草』『蔦かずら』『一葉』『兄いもうと』『花筏 谷崎潤一郎・松子 たゆたう記』『波枕 おりょう秘抄』『建礼門院徳子』『めぐり逢い 新島八重回想記』などがある。

そうせき つま
漱石の妻

とりごえ みどり
鳥越 碧

© Midori Torigoe 2013

2013年6月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277568-7

目次

序章

一章 妻となりて

二章 英国は遠く

三章 かけちがひ

四章 「妻さいは？」

五章 別れ

終章

あとがき

解説 竹内洋

474 470 462 383 275 179 108 16 7



講談社文庫

漱石の妻

鳥越 碧

講談社

目次

序章

一章 妻となりて

二章 英国は遠く

三章 かけちがひ

四章 「妻さいは？」

五章 別れ

終章

あとがき

解説 竹内洋

474 470 462 383 275 179 108 16 7

漱石の妻

序章

風が心地よい。芯に冷気を残しながら、うつすらと温もりを運んでくる。

かすかに花の香^かがする。何の花だろう。懐^{なつ}かしい。が、想い出せない。

こんな時、数年前まではじれつたい思いがしたのだが、近頃はしいて追い求めはない。花の名か、とりたてて言うことでもなかろう。今、この時に漂う優しい香りを、ただゆつたりと味わえればよい。

八十歳を過ぎて、鏡子^{きょうこ}はおぼろげに分ってきた。ものの名前など、符号にすぎやしないのだと。一輪の花にも、人それぞれ、異う想いを抱く^{ろうく}のだから。

縁側の籐椅子で、早春の午後の陽を丸太のような老軀^{ろうく}いっばいに浴び、鏡子は、そんな事をなんということもなく考えながらうつらうつらしていた。

「悪妻と言え、ソクラテスの妻でしょう」

突然、男の声がのどかな空間を揺らした。

テレビか、と鏡子は眼を閉じたまま頷く。

引き続いて部屋の中から、消し忘れたクイズ番組の軽快な音楽が流れてきた。

「悪妻——」鏡子の眉間に縦皺が寄る。

夫が亡くなつて四十余年、鏡子の悪妻説は定着していた。夫の友人達や弟子筋の者達から、否、夫や自分をじかに知らない人々からも、鏡子は悪妻と呼ばれ続けてきた。

与謝野晶子や平塚雷鳥のように、歌人とか社会運動家などの肩書はおろか、職業というものには生まれてこのかた一度も就いたことのない、専業主婦であつた自分に貼られた^{あだな}綽名が悪妻とは、鏡子の人生が真向から否定されたも同然である。

未亡人になつても悪妻と言われ、おそらく、その死後もそう呼ばれ続けるであろう妻の^{おのう}懊悩を、^{せんか}泉下の夫は知っているのか。一生つれ添つた女房を悪妻と呼ばせて、安らかに眠つていられるのだろうか。

確かに、世間一般から見れば、穏かな夫婦だつたとは言いがたい。

しかし、夫婦にはそれぞれ、その夫婦特有の色合いがある。他人からは決して見えない波長もあるう。夫と自分の間にも、怒濤^{どとう}の底に、二人にしか聴き取れない調べが流れていたはずなのに。そう思うのは自分ひとりなのであるうか。

夫だけを、ひたすら視つめてきた。なのに、どうして悪妻と呼ばれなければならないのかつたのだろうか。

悪妻も呼称こしやう、符牒ふちようのようなものと笑つては済まされない。

しばらく忘れていた憤りいきどおが沸々と滾たぎつてきた。おや、怒っている。すべての感情が緩慢かんまんに上滑りしていく古木の裡に、まだこれほどの激情が渦巻くものかと、鏡子が小首を傾げた時、

「またテレビつけっ放しにして」

声だけは若々しい娘の栄子えいこが入ってきた。

二男五女の七人の子供の中で、末の雛子ひなこは二歳で亡くしたが、あとの子達はどうか無事に成長し、今では孫も十四人になる。次女の恒子つねこが風邪がもとの肺炎で、三人の幼子を残して逝つたのはなんとも哀れであつたが、我子を産み抱いだいた母親の幸せは感じたはずである。だが、三女の栄子だけは独身で通し、六十歳を目前にした近頃は、白髪も苦にならない様子である。

ずっと母親の面倒を見て、姉弟の中で一番貧乏籤くじを引いてと不憫ふびんに思つたこともあつたが、こうして母娘二人、手伝いの女ひとを置いてのんびりと過ごせる日々も、そう悪いものではなからうなどと眺める時もある。とはいえ、栄子が自身の境遇をどういうふうに捉えているのか聞いたことはない。

思えば、栄子にかぎらずどの子とも、その心の裡をしんみりと語り合つたことなどない。我子といえども踏み込めない何かがある。子供達は両親に対して、他所よその家庭以上に太い境界線をしっかりと引いている。そんなふうに感じるのは、和やかな家庭環境を与えてやれなかったという自責が、鏡子の中で尾を引いているからかもしれない。

栄子はテレビのスイッチを切ると、鏡子の前の籐の小テーブルの上に、お茶と羊羹ようかんの載つた盆を置いた。

「ほらほら、うたた寝をしていると風邪をひきますよ」

「寝てませんよ」

「うそばかり、こつくりこつくりしてたわよ」

栄子が足元に落ちていたタータンチェックの膝掛ひざかけを拾い、鏡子の胸のところまで引き上げる。

「あら、梅ね、いい匂いだこと」

「そうだよ、梅の香を楽しんでいたんだよ」

「でも、閉めますよ。風はまだ冷いから」

そう言うと、栄子は音をたててガラス戸を閉めた。

「テレビ消さないでおくれ」

「そこからじゃ見えないじゃない」

「見えなくてもいいの、聞いてたのだから」

「相変らずね、お母さまは」

栄子は低い声で笑うと、テレビのスイッチを入れて、ことさら忙しげな様子で鏡子の部屋を出ていった。

いつの頃からか、家事の主導権が逆転した。この籐の椅子にしても、昔ならば夏の訪れと共に蔵から出し、九月の声を聞けば被^{おお}いを掛けてしまい込んだものだが、栄子の世代ではそれは無駄な労働らしい。季節感がないの風情^{ふぜい}に欠けるのと言つても、取り合つてはもらえない。

「来年は、いよいよオリンピックですね」

テレビの声が誇らしげである。そうか、東京オリンピックか。

夫が生きていたら何と言うだろう。

明治維新^{いしん}になり長い太平の夢から叩き起こされて、西洋に追いつかねばと慌^{あわ}てふためき見苦しいかぎりだ、と非難の眼を向けていた夫である。

夫が学術論文や講演などで何を書き何を言おうとしているのか、襖^{ふすま}越しに弟子達との語らいが洩^もれ聞えてきても、鏡子にはまったくもって何のことやら解らなかつた。時に夫が気紛れに一言二言絵解^{えと}きらしきものをしてくれても、少しも理解出来なかつ

た。そもそも鏡子には、横文字まじりの夫の論文や講演など、なんら興味も湧かなかつた。いや、国民的作家として人気を博した夫の小説にしても、その奥に漂うものを透し見るのが億劫であつた。

けれども、半鐘の音に飛び起き右往左往している母国に、じれて齒ぎしりしながら、なおも深く執着せずにはいられない夫の熱い想いは素直に信じることが出来た。第二次世界大戦で世界の列強を相手に無惨に叩きのめされ、敗戦の淵から這い上がり、こうして平和の象徴のオリンピックの開催国にまでなるのを聞けば、夫はどれほどに喜ぶことであろうか。

「嬉しいでしょう、あなた」

——手放しで歓喜することか。どう転つていくか、まあ、高見の見物だな。

腕を組みにこりともしない相手に、鏡子は詰め寄つた。

「息も絶え絶えな瀕死の状態から必死で起き上がり、一生懸命に頑張ってきたのよ。これからもきつと一步一步真面目に歩いていきますよ、この国は」

——どうだかね、人間つて者は、弱く流されやすいもんだ。いつまで勤勉で真面目な国民性が保たれるだろうか。繁栄を見知つた若者に何が期待できるもんか。彼等が真に眼覚めるのを待つほど、この世は悠長じゃなからう。

「でもね、あなた、知ってますか？ 会社や御役所の就職試験で、愛読書はとか、好

きな作家はつて聞かれて、あなたの御本や名前を挙げると、それですんなりと関所が通られるのですつて」

——なんだい、そりや。無難つてことか？

「そうらしいわね」無意識に皮肉なもの言いになる。

——そんなものか。

夫の声がいっになく打ち拉^{ひし}がれているように聞えた。ちよつといい気味がした。凡人と鏡子を見下した夫が、一般大衆に国民的作家と持ち上げられ、明治の文豪と敬愛されて、明治、大正、昭和と愛読されてきたのだ。

「唯、人が評価をし、支えてくれたからこそその文豪なのですよ」

鏡子は目を閉じたまま、口の端で小さく笑った。

口髭の右端をこころもち持ち上げるようにしてやる、夫の、あのなんとも人を小馬鹿にした蔑笑^{べっしょう}を鏡子が真似するようになったのは、いつ頃からであろうか。

夫が存命中から、その外出した後に、いや在宅中でも夫のいる書齋に向つて、いや、すぐ目の前の背中に向けて、鏡子はこの冷笑を投げ返してきた。

実のところ、二人の結婚生活は、冷笑の投げ合いというような、そんな生温^{なまぬる}いものではなかった。

家庭は断じて憩い^{やすみ}の場などではなく、戦場そのものだった。鏡子は手向い、ずたず